



■文=小山田桐子/憐D&N ■イラスト=大久保ヤマト  
※この物語は史実を基に、一部フィクションで作成されています。  
【問】市観光課観光推進係 (☎ 77・8563)

# 立花宗茂 と闇千代 ドラマプロット

—こんな大河ドラマが見てみたい—  
第25話

戦場のことなり  
すべてお見通し?!  
宗茂、経験と天性の直観力で  
将軍・秀忠をサポート

大坂城と豊臣軍を圧倒的な数の徳川軍がぐるりと囲んでいる。大坂の役、夏の陣。宗茂は軍事参謀として秀忠の横に控え、戦場を眺めていた。偉大な父に対するコンプレックスから、常に虚勢を張り、余裕のない秀忠。彼は宗茂にも反発し、今後の戦況を予想するよう挑発する。

「大坂城はすぐに落とせる城ではありません。最初は張り切って攻めている兵たちも、5日後にはダレてくるでしょう。その時を見計らって、敵が打って出てきたら、崩れる可能性があります。はばかりながら、本陣を下げるべきかと」  
7日目、宗茂の言葉どおり、本陣を守る旗本までもが崩れた。宗茂の読みの確かさに、秀忠は驚き、すっかり心酔して

しまう。

当初は兵力も劣り、統率も取れず、押されていた豊臣軍。しかし、作戦が失敗し、やぶれかぶれとなった豊臣軍の予想もつかない動きに、徳川軍は虚を突かれてしまう。突っ込んでくる豊臣軍の勢いに押される徳川軍。真田信繁であれば、この機を逃さず、まっすぐ家康のいる本陣を直指すはず。宗茂の読みを聞いた秀忠は、伝令を飛ばし、すぐさま家康に伝える。

もともとかなり奥にあった家康の陣。しかし、家康は宗茂の予測だと知ると、念のため、陣を厚くした。

危機一髪!

家康の危機を救った宗茂の忠告  
真田信繁、最期の大勝負

敵味方が入り乱れる中、宗茂の読みどおり、弾丸のようにまっすぐ切り込んでくる信繁軍。「不惜身命」の旗印のどお

り、自らの命も顧みず、刀を振るい、ひたすらに家康の首だけを指す。

しかし、家康の青ざめた顔が見えたかと思いきや、信繁は身を挺して家康を守る兵に阻まれる。

その後も、信繁は何度も突破を試みるが、最期の薄皮一枚の守りを打ち破れず、退けられる。陣を厚くしていなければ、家康は討ち取られていたかも

しれない。家康は何度も自害を覚悟するほどだった。

徳川の援軍が到着した。豊臣軍の勢いも尽き、徳川軍の勝利はゆるぎないものとなっていく。

多勢に無勢。信繁もついに討ち取られてしまう。信繁の鬼気迫る戦いぶりを、遠くから見つめていた宗茂は、その壮絶な最期にひとつの時代の終わりを感ずるのだった。

### ～人物紹介～

宗茂と共に生きた有名武将たち⑥

徳川秀忠 (1579～1632年)



宗茂が補佐した第二代将軍。

本来は大人しく、素直な性格だが、家康という偉大な一代目のあとを継ぐことになり、余裕がなくピリピリしている。宗茂にも最初は反発するが、次第にその経験と洞察力を頼りにするようになる。



十時家に伝わったガラス湿板 右から2番目が十時無事老

この写真は、十時家という柳藩士の家に伝わった写真です。写真に写っている6人のうち右から2番目の男性だけ十時無事老(1826～1893年)であることが分かっています。

無事老は大成流という柳藩の西洋砲術の創始者で、柳河藩士十時右馬助の四男として文政9年に生まれました。嘉永6(1853)年、長崎で西洋砲術をはじめた高島秋帆に学び、安政6(1859)年柳河藩の師範役に就任。その後、坂本小路(現坂本町)に鵬博館という学校を建て、砲術の他、蘭学や漢学を教えました。

その風貌は、「背が高く、やせていて、鼻は高く出て出っ歯、目つきが鋭かった」と後に柳河藩士曾我祐準が述べています。議論する時は口から泡を吹くほどの激しさで、柳河藩でその名前を知らない者はいなかったそうです。

この無事老と共に座っている男性は、おそらく無事老の甥にあたる十時一郎(1843～1904年)ではないかと思われます。写真が十時一郎の子孫の家に伝わっていたことや、この人物の身なりから、当時この家

## 十時家に伝わったガラス湿板

柳川市史編さん係 江島 香

の当主だった一郎だと考えることが自然だからです。一郎は、戊辰戦争に出陣し、明治以後は福岡県会議員や山門郡長兼三池郡長を務め、明治23(1890)年第1回衆議院議員選挙で当選しました。

この2人に共通しているのは、2人とも洋装だということ。無事老はマントとズボンを身につけ、革靴を履いています。また、一郎と思われる人物も長袖の上着とズボンを身につけ、同じく革靴を履いています。撮影された場所は、床面や背景の状況などから、スタジオだと思われるまです。撮影時期は、幕末から明治の初期ではないでしょうか。

京都や大阪の写真師のものは敷物が異なることから、柳川出身の写真師で、焼失前の柳川城の写真撮影した富重利平が、古里柳川で開業したときに撮影した可能性も否定できません。

推測が多くなりましたが、この写真の一番の魅力は、なんと、言っても激動の時代に青年期を過ごした柳川の人々の姿を見ることができるところです。こうした写真が大切に伝えられてきた努力に、敬意を表したいと思えます。

市史編集委員会では、数年後に写真を中心とした本を刊行する予定です。現在さまざまな写真や絵はがきなどを集めています。隔月1日号に、同委員会で集めた写真を紹介します。

【問】市生涯学習課市史編さん係 (☎ 72・1275)